

工業浸流  
大型案件に強み「コーティング鋼管」  
NETIS登録、新たな展開も

流動浸漬法によるコーティング鋼管のパイオニア、流浸工業（社長＝大久保秀俊氏、本社・大阪府堺市美原区大保225）の2019年12月期

（2019年1月～12月）これまでの業績は、首都圏においては五輪関連の案件が山場を越え、大型再開発事業が始動する手前段階の端境期というところもあり、受注は落ち着き気配。とはいえ、次に控える大型案件ではすでにスペックインされており、九州エリアでの再開発に関連する引き合いも出始めている。今期は好調に推移した前期並みの着地を見込み、これ

から来期以降を視野に入れた助走に入る。流浸工業の流動浸漬法は、流動浸漬用パウダーを入れた槽の下部に多孔質の隔壁を設け、ここに圧力をかけた空気を注入、圧力で隔壁上部の粉体を均一に浮かす。この流動層に加熱した基材を浸漬することでピンホールのない均一な塗膜を形成する技術。この技術で開発した「内外面PVCコーティング軽量鋼管」

が国土交通省のNETIS（国土交通省新技術情報提供システム）に登録されたのが今期のトピックス。同軽量鋼管は板厚1・6ミリの鋼管に板厚6ミリの薄型フランジを両側に溶接し、流動浸漬法で全面PVCコーティングを施したもの。流浸工業の自社ブランド製品「リユーコートLight（ライト）」や栗本鐵工所の「クリモト臭突管」として販売され、大型施設や再開発関連での採用事例が多い。工事会社がNETIS登録された新技術を活用すれば公共工事の工事成績評定で加算される利点があり、国土交通省からの受注にプラス材料となり、民間工事でも登録商品を使う安心感が生まれるという。

同社では今期以降、「市場ニーズを吸い上げて次の製品開発につなげる」（大久保社長）動きを加速させるとともに、樹脂コーティング技術や基材加工技術を生かしたOEM製品開発にも力を入れていく。大久保社長は「お客さまの困りごとに対してコーティング技術で付加価値を与え、使ったいただくのが当社の役割。その技術を以て自社ブランドであるリユーコートシリーズを上市してきたが、今後は配管分野に関わらず当社の持っている開発技術、製造技術を駆使し、他の製品にも自社ブランド化を進める研究開発を深耕したい」としている。

ち着き気配。とはいえ、次に控える大型案件ではすでにスペックインされており、九州エリアでの再開発に関連する引き合いも出始めている。今期は好調に推移した前期並みの着地を見込み、これから来期以降を視野に入れた助走に入る。